

曰 次の文章を読んで後の間に答えなさい。

『源氏物語』で使われていることばの数は^Aべでほぼ二十二万語あまり（助詞や助動詞のたぐいは省略して）であるが、その中で三百語ほどのものもとてもよく使われる語をえらぶ作業をしたことがある。『源氏物語』は春夏秋冬なしには成立し得ぬ物語であるが、三百語内で見てみると、夏と冬は登場せず、秋は春よりずっとよく使われている。

一般に、平安女流文学の季節は秋であるといえるかもしれない。源氏にしても、数々の名場面はどうも秋であることが多いのではなかるうか。そして、秋の風光の色はといえば、もみじ、紫苑^{しおん}、萩。紅、黄、紫。さらに私はそこ¹に霧の効果を添えてみたい。秋にはその透明度の点において両極がある。くつきりと澄みきった、色相を^Bジュンスイのきわみで見さだめる面と、おぼろおぼろに、春の霞とはまたちがつて、まるで涙の冷たさのように、心のかげりそのままに、鮮やかな色の上に吐息^Cがかぶさってゆく不透明な面とである。

私は仙台に行つて、京都の霧がしみじみ恋しかった。みちのくの秋は^aさながら鮮やかな絵具をパレットに流し出したかのようにくつきりと美しかった。きれいなのだ。しかし、川霧や谷霧の中に浮かびあがるかすかな色を見なれた私には、そのくもりのないみごとなみちのくの色彩は少しまぶしかった。

霧は大切な秋の色だなど、京都を離れて思ったことであつた。霧は視界を^Dサマタげるのではなく、ものの色に不思議な影をつけるのである。秋ならではの^Eピミョウな絵具である。

そして私は、秋の色といえいつも白菊を思う。九月九日の重陽の節句に活躍する白菊の色の^{※1}エスプリは「うつろい」である。ただただ白いというその一瞬からかすかに^{うれい}愁の紫色をおび、そしてさらに黄がかつてゆく。白菊の色の一生は、まさしくうつろいの美である。²変転の美しさ²と悲しさを花一輪の中に見ることができる。

うつろいはまた、である。京の秋が美しいといわれるのは、おそらくは喜怒哀楽の中に生きて、そして死んでいったさまざまの人の歴史が特によみがえるからではなからうか。もみじもまたうつろうてゆく。はじらいがちなもみじは^{※2}はじめから、情熱を傾けた燃える赤や黄になつて、そして散るための身ごしらえをしてゆく。それは人の一生にも似て、まさしくうつろうてゆくのである。春の花の季節とちがうのは、秋はとりわけ³人生

への思いを重ねて色を見るということであろう。 へ 『花の名随筆』寿岳章子 へ

※1 最も大切な部分。
※2 紅葉すること。

問一 〓 線AとEのカタカナを漢字に直し、漢字は読みかたを答えなさい。

問二 〓 線aと最も意味が近い言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア したたか イ ぞんがい ウ おもむろに エ あたかも

問三 〓 線1の効果とはどんなものか。本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問四 〓 線2に「悲しさ」があるのは、変転にどんな一面を感じるからか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問五 〓 に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 風景の美学 イ 自然の基礎 ウ 歴史の本質 エ 人生の真髓

問六 〓 線3とはどういうことか。解答欄の言葉に続けて、本文中の言葉を使って三十文字以内で説明しなさい。

問七 〓 次の設問に答えなさい。

問一 次の漢字の反対語を答えなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 過失 | ② 創造 | ③ 濫読 | ④ 虚偽 | ⑤ 特殊 |
| ⑥ 消費 | ⑦ 決算 | ⑧ 守備 | ⑨ 玄人 | ⑩ 軽率 |

問二 次の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 円滑 | ② 境内 | ③ 举措 | ④ 暫時 | ⑤ 頒布 |
| ⑥ 吹聴 | ⑦ 遵守 | ⑧ 逼迫 | ⑨ 功德 | ⑩ 輪廻 |

問三 次の四字熟語の□に当てはまる漢字を一字で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|---|
| ① 付和□同 | ② 意味□長 | ③ 温厚□篤 | □ |
| ④ □前絶後 | ⑤ 質実□剛 | ⑥ □晴□雨 | □ |
| ⑦ 大器□成 | ⑧ 大同□小 | ⑨ □骨□碎 | □ |
| ⑩ 沈□黙考 | | | |

問四 次の故事成句の□に当てはまる漢字二字を答えなさい。

①
あれば陽報あり。・・・ひそかに徳を修め、人のためになることをすれば、よい報いが目に見えて現れること。

② 魚心あれば
。・・・相手の出方次第で、こちらもそれに応ずる用意があること。

③
の粟を拾う。・・・他人の利益のために危険をおかすこと。

④
を執る。・・・団体などで支配的な位置につくこと。

⑤
の功。・・・苦勞を重ねて学問をした成果。

⑥
は拙速に如かず。・・・物事をするのが上手でも遅ければ、少々へたでも速いには及ばないということ。

⑦
に富む。・・・年若く将来性があること。

⑧
の志。・・・手柄を立て、立身出世しようと望む心。

⑨ 人間じんかん到る処
あり。・・・郷里を出て大いに活躍すべきだということ。

⑩ 人間にんげん
塞翁が馬。・・・人間の吉凶禍福は予測できないということ。